【岡田會頭古稀記念論文】

巨大ナル前額竇「ムコツエーレ」ノ一例

Ein Fall von grosser Mucocoele der Stirnhöhle von Dr. Chikamichi Masukawa.

日本赤十字社病院耳鼻喉科（治療主幹醫學博士 岡部剛二）

増 川 允 通

内 容 目 次

- 一、症 例 二、手術及び経過
三、竇内内容液ニ就テ 四、結論及び考按
引用文 獻

緒 言

元來前額竇「ムコツエーレ」ハ比較的稀有ナル疾患ニシテ、初メキリアン氏ガ其文獻上ニ六十四例ノ症例ヲ集メ秩序的ニ記載シ、コレニ擴張性前額竇炎（Sinusitis frontalis chronica cum dilatatione）ト命名セシヨリ、初メテ一個ノ獨立セル疾患トシテ認メラル、ニ至リシモノニシテ從來漠然タル所説ハ一定サル、ニ至レリ。而シテ是ガ本態ニ關シテハ、腐骨、膿瘍、瘻孔等ヲ形成セザル前額竇ノ骨壁擴張ヲ以テ經過スル前額竇炎ナル事ヲ意味シ、且ツ又ハエック氏ハ尙ホ竇内ニ漿液又ハ粘液ヲ蓄積シ同時ニ一時性或ハ永久性ニ鼻前頭管ノ閉塞アリテ、遂ヒニ竇壁ノ膨隆ヲ來タセルモノナリト言ヲ添フルニ至リ益々其意義ヲ明ラカニセリ。

即チ竇内内容ノ漿液或ハ粘液が増加スルニ從ヒ骨壁ヲ壓シ骨ハ次第ニ削瘦シテ壁ノ膨隆ヲ來タスモノニシテ内内容液ノ骨壁ヲ壓迫スル事愈々進メバ骨ハ益々削瘦甚ダシクナリ、遂ヒニハ骨質ノ吸收ヲサヘ招クニ至リ、或ハ皮下ニ、或ハ頭蓋内ニ於テ硬腦膜ト直接觸ル、ニサヘ至リ茲ニ於テカ患者ハ一般ニ頭痛、頭重感、壓迫感、或ハ又神經痛、眼球突出、眼球運動障礙等ヲ來タス事既ニ文獻上ニ記載セラル、所ナリ。而シテ是ガ發生ニ關シテハ先キニ吉井丑三郎氏ニヨリテ詳細記載セラルレ共、結局、キリアン、スタイナー、ツッケルカンドル、アレキサンダー、アペルリス、ステンゲル等ノ諸氏ニ依リ記載セラレタル（一）、外傷性ニ因ルモノ。（二）、粘液腺ノ囊腫變性ニ依ルモノ。（三）、竇粘膜ノ慢性炎症ト共ニ鼻前頭管ノ閉塞或ハ狹窄ヲ伴ヘルモノ。（四）、篩骨蜂窩ニ發生セル骨胞腫ガ前額竇内ヘ進入セルモノニシテ前額竇ノ内自身ノ疾患ニ非ズトセルモノ等ヲ舉ゲザルベカラズ。又其經過ニ就キテバ一般ニ頗ル緩慢ナル事ヲ報告セラレ。十一二十年ノ歲月ヲ要

セルモノアリ。數年間同一狀態ニ止マルモノモアリテ從テ其大イサ又種々ニシテ *Beethoven* 氏ハ二ケ年ノ經過ニ於テ一〇〇ccノ内容ヲ有シ *Targenbeck* 氏ハ九年後一〇〇ccノ内容ヲ、又 *Prochnow* 氏ハ手拳大ノ二倍ニ達スル大ナル前額竇ヨリ約三〇〇ccノ内容物ノ流出セルヲ報告セリ。

本症ニ對スル診斷シテキリアン氏ハ前額竇部位ニ於ケル形態上ノ變化、眼球ノ壓排ヲ伴ナフ眼窩部周圍ノ形狀變化、疼痛、其他ノ局所症狀ノ缺如等ヲ舉ゲ、又腫瘍ノ發育緩慢ナル事、腫瘍壁ノ硬度ハ擴張ノ程度ニ依リ、時ニハ硬固、時ニハ彈力性ニシテ羊皮樣捻髮音ヲ發スルコト。又時トシテハ骨壁ノ吸收高度ノ爲メ、其缺損ヲ來タシ居ル等ヲ舉ゲテ骨腫、ソノ他ノ良性乃至ハ惡性腫瘍トノ鑑別ニ資シ、必要ニ應ジ試驗穿刺ノ要アルヲ記載セリ。

余ハ最近ニ於テ一症例ヲ經驗セルヲ以テ之ヲ大方ノ一癡ニ供セントスルモノナリ。

一、症 例

患者 飯沼 某 男子 六十三歲 雇人。

家族歴 祖父母ハ既ニ病沒シ、原因不詳。

父ハ六十六歲、母ハ七十歲デ何レモ病沒、詳細不詳。

兄妹ハ全部デ四名、患者ハソノ三男ニ當リ、長兄ハ七十歲ノ高齡デ尙ホ健在、次兄ハ六十六歲デ死亡(原因不詳)。妹ハ二十六歲デ健在。

既往症 幼時ヨリ健康ニシテ、少年時代ニ至リ兩眼ヲ病ミ屢々醫師ノ門ヲ叩キタル他醫療ヲ乞ヒタルコト無シ。飲酒、喫煙ハ之ヲ用ヒズ。性病ハ嚴ニ否定ス。

現症ノ既往症 大震災以前(年月不明)某所ニ於テ鶴ノ檻ヲ覗キシ際、嘴ヲ以テ前額部ヲ輕ク突ツカレシ覺エアルモ、當時殊更疼痛ヲ感ジ或ハ創傷等ヲ被リタル事モ無ク、ソノ儘經過シ、其他外傷トシテ受ケタル記憶モ無シト。約七、八年前ニ左側前額部ニ大イサ不明ナル小ナル腫瘍ノ發生ニ氣付キタルモ前頭部ニ於ケル僅少ナル緊張感ノ他、自然痛、壓痛、頭痛等ノ障礙無キマ、本日ニ至ル迄醫療ヲ乞フ事ナク放置セルモノニシテ、腫瘍ハ次第ニ増大シテ今日ニ至リタルモノナリ。

現症 昭和六年五月二十日頃ヨリ兩眼ノ視力頓ニ衰ヘ視力減退ヲ主訴トシテ本院外來眼科ヲ訪レ、其際「トラホーム」性「パンマス」並ビニ前額竇「ムコツエーレ」ノ診斷ノ下ニ、同六月一日入院専ラ眼科ノ治療ヲ受ケ居リシモノニシテ、體格ハ稍々小、榮養ハ中等度、皮下組織ハ少シク萎縮シ、皮膚ハ幾分乾燥ノ感アリ。

粘膜ノ色ハ殆ンド尋常ナリ。胸腹部臓器及ビ四肢ニハ認ムベキモノ無ク、検尿、検便ノ結果モ特ニ認ムベキモノナシ。グリス反應陰性。

顔貌ノ形態ヲ述ブレバ左側前額部ヨリ同側上眼窩縁内方半部並ビニ同側鼻背ニ亘ル大イサ、ホヽ鶯卵大、卵圓形、半球狀ニ突出シ、横徑最大部ニ於テ約四・五浬、長徑最長部ニ於テ約五浬、左側上眼窩縁ヨリ其中央最高部迄約一・五浬、鼻背ヨリ約二・四浬ノ高サヲ有スル大ナル腫瘍アリ。上端ハ左側前額部ニ於テホヽ左眼内眥部ノ直上ニ位シ、眼窩縁ヨリ一・五浬ノ高サ。下端ハホヽ左側鼻骨ノ下端ニ位ス。左端ハ上眼窩ノホヽ中央部ニシテ眉毛ノ直下。右端ハ右側鼻骨上端ト前頭骨トノ附着部ニ相當ス。ソノ爲メニ左側眉毛ハ右側ヨリ稍々上方ニアリテ上眼窩縁ハ前方へ突出シ、左側内眥部ハ壓迫サレテ上眼窩ハ下垂シ、眼球ハ陥没シ、下方へ壓迫サル。左側瞼裂ハ半バ閉鎖サレ瞼裂間ニ半透明、白色ノ分泌物ヲ附着ス。

該腫瘍ヲ觸診スルニ硬度ハ硬固、表面平滑ニシテ緊張シ、周圍皮膚ノ色ト異ナル所無ク、又皮膚トハ癒着ナシ。且ツ移動ナク觸診ニ際シテ壓痛ナシ。

鼻科的所見。九月十七日耳鼻科外來ニ於テ初メテ耳鼻咽喉科的診察ヲ行ヒシニ、兩側鼓膜並ニ外聽道ニハ變化ヲ認メズ。聽力ホヽ尋常。前鼻鏡検査ニ於テハ左側中甲介ハ著シク肥大シ、鼻中隔壁トノ間隙ヲ殘サズ。

同側下甲介モ亦著シク發赤、腫脹スレ共兩鼻腔トモニ鼻茸乃至ハ膿性鼻汁等ノ存在ヲ見ズ。鼻中隔ノ彎曲ハ特ニ擧グベキ程度ニ非ズ。右側中甲介ハホヽ尋常ニシテ下甲介ハ輕度ノ發赤、肥大ヲ認ムルノミ。後鼻鏡検査ニ於テハ殆ンド前鼻鏡検査ニ等シク、認ムベキモノ無シ。

他、口腔、咽頭、喉頭等ニハ異ナル所ヲ認メズ。

X線所見。左側前額贅ヨリ同側篩骨蜂窩ニ亘ル大ナル卵圓形ノ陰影ヲ認ム。

眼科的所見。入院時兩眼ノ視力ハ、右眼ハ視力零。左眼ハ眼前指數ヲ辨ズルノ程度ニシテ、瞳孔ハ中等大、圓形左右ホヽ同大。右眼角膜ハ極度ニ濁濁シ且ツ瞼結膜ハ左右同程度ニ發赤、腫脹セルヲ認ム。自覺的ニハ羞明、流淚等アレ共疼痛ハ感ゼズト。

二、手術及ビ經過

九月二十五日、左側中甲介切除術ヲ行ヒシニ經過頗ル順調ニシテ、出血、疼痛等少ナク數日ヲ出デズシテ治癒ス。其後鼻前頭管ヲ經テ前額贅へ消息子ヲ通セントスルモ鼻腔天蓋下方へ壓迫サレ、自然孔ノ位置又不明ニシテ之ヲ通ゼシムル事能ハズ。

十月七日、〇・五%「ノボカイン」液注射ノ下ニキリアン氏術式ニヨリ左側眉毛ノ中央部ニ於テ之ト併行ニソノ外端ヨリ皮膚切開ヲ加ヘ、眉毛ノ内緣部ヨリ弓狀ニ下方鼻骨ノ下端ニ達スル迄延長セリ。骨膜切開ハ上眼窩縁ニ沿ヒテ骨橋ヲ殘留セシメツ、手術ヲ進メントセルモ上

眼窩縁ノ外方2/3ハ骨ノ吸收破壊著シク、或ヒハ極度ニ菲薄トナリタル部分等ノ存在セル爲メ止ム無ク内方約1/3程度ヲ僅カニ殘スニ留メタリ。

骨膜切開ト共ニ骨缺損部ヨリハ粘稠、暗褐色、膠樣、無臭ノアダカモ「チヨコレート」樣内容液ノ旺シニ流出スルヲ認メ、之ヲ注射器ニテ吸引シ取除キツ、骨膜剝離ヲ行ヒシモ腫瘍ノ膨隆部骨壁ハ殆ンド紙樣菲薄トナリ、骨膜ノ剝離頗ル困難ナリ。該部ハ骨膜ト骨壁トヲ同時ニ除去セリ。斯ノ如クシテ前額竇ノ前壁ヲ開放シ竇内内容液ヲ吸出スルニ内部ハ大ナル一個ノ空洞ヲ形成シ、而カモ竇ノ後上壁ノ部ニ於テ拇指頭大ノ骨缺損アリテ硬腦膜ノ搏動スルヲ認ム。粘膜ハ一般ニ暗紫色著シク肥厚セル部アリ或ハ肥厚ノ著シカラザル部アリ。空洞ノ大イサハ横徑約五糎、縱徑約四糎、深サ腫瘍ノ最高部ヨリ測リテ約四糎ヲ算ス。前記硬腦膜ノ露出セル部ノ周圍粘膜以外ハ殆ンド之ヲ剝離除去ス。斯クシテ上述ノ如ク上眼窩壁ハ勿論、内側壁モ著シク菲薄トナレル爲メ眼球ノ損傷ヲ防ギツ、篩骨蜂窩部ヘ進ムニ此部ヨリモ前額竇内内容液ト同様ノ分泌液ノ流出スルヲ認ム。篩骨蜂窩内ノ小骨壁ハ著シク軟化破壊シ、ソノ大部ハ原形ヲ止ムルモノヲ認ムル能ハザルノ狀態ナリ。之等變性セル小骨片ハ暗褐色ナル分泌液中ニ散見スルコトヲ得、篩骨蜂窩内ニ於ケル粘膜ハ前後ノ蜂窩トモ共ニ前額竇粘膜同様ニ暗紫色ヲ肥厚スルヲ認メ、之ヲ剝離除去ス。斯ノ如クシテ手術ノ大部ヲ終リ、前額竇ヨリ自然孔ヲ開大セシメテ鼻腔内ヘ大ナル交通路ヲ作り「ガーゼタンボン」ヲ通ジテ僅カニソノ先端ヲ竇内ニ止ムル如クシ、後日鼻腔内ヨリ除去ヲ易カラシメタリ。手術ハ以上ノ如クニシテ軟部組織ノ縫合ト俱ニ終リシモノナレ共、幸ヒ術後ノ經過頗ル良ク出血、疼痛、頭痛、眩暈、嘔心、嘔吐等ノ障礙無クシテ經過シ術後三日目最初ノ繃帶交換ヲ行ヒ同時ニ鼻腔内「タンボン」ヲ除去ス。

此際左側前額部ヨリシテ創面全般ニ亘リ皮膚暗赤色浮腫狀ニ腫脹スレ共數日ヲ出デズシテ消褪シ皮膚ノ色澤又正常ニ復セリ。斯クシテ約二週日ノ後全ク治癒シ患者ハ感謝ノ意ヲ表シツ、退院セリ。

三、竇内内容液ニ就テ

竇内内容液ハ約五二ccヲ算シ、上述ノ如ク暗褐色、粘稠、膠樣性ニシテ外觀「チヨコレート」樣色調ヲ呈シ、無臭且ツ培養上全ク無菌的ナリ。只夫レガ化學的性狀ヲ檢シ得ザリシヲ遺憾トスレ共、之ヲ文獻上ニ求ムルニキリアン氏(一九〇〇)ハエック氏(一九一五)等ハ各々其成害中ニ於テ、副鼻竇ノ非化膿性慢性炎症ノ際、殊ニ粘膜ノ囊腫性變性ヲ來タセル場合ニハ、該囊腫中ノ漿液乃至ハ粘液中ニハ「コレステリン」結晶ヲ認ムルコトヲ記載シ、且ツ又同胞諸家ノ報告中ニモ同様ノ記載ヲ散見セリ。以是觀之或ヒハ本症例ニ於ケル竇内内容液中ニモ「コレステリン」結晶ヲ含有セルニ非ズヤト思惟サル、モノナリ。

四、結論及考察

本例ハ六十三歳ノ男子ニ發生セル巨大ナル前額竇「ムコツエーレ」ニシテ副鼻腔症狀少ナク主トシテ眼科的症狀ニ富ミタル一例ナリ。是ガ發生ノ原因ニ關シテハ先キニ緒論ニ於テ述ベタル如ク、キリアン、スタイナー、ステングル、アベリス氏等ニ依リ其所説各々一様ナラズト雖モ、本症例ノ如ク特ニ外傷ニソノ因ヲ發スルト思惟サル、モノヲ有セザル事、又粘液腺ノ擴張ニ因ルモノナリヤ否ハ尙ホ組織學的検査ニ俟タザル可カラザルモ、吉井氏ハ其症例ニ於テ粘液腺ノ存セザリシヲ記載セリ。

且ツ又篩骨蜂窩ノ骨胞腫形成ニ就キテノ所説ニ對シテハ鼻科的検査並ビニ手術時所見ニヨリ之ヲ認メ難ク、最後ニ粘膜ノ慢性炎症ト共ニ自然排出孔ノ閉鎖トニ因ル見解ニ對シテハ、本例ノ如ク竇内粘膜ノ全般的肥厚並ニ鼻前頭管ノ閉鎖等ハ些カ相倚ルモノアルヲ思ハシメ、而カモ前額竇ニ發生セル「ムコツエーレ」ノ下方、篩骨蜂窩部位ヘ及ビシモノナリト思惟スルヲ妥當トセンカ。

擧筆スルニ流ミ御校閲ヲ賜ハリタル治療主幹醫學博士岡部剛二先生ニ深甚ノ謝意ヲ表ス。

附記。本例症ノ大意ハ昭和七年十月十七日、東京地方會第四回大會ニ於テ報告セルモノナリ。

HAUPTLITERATUR.

- 1) Denker und Krehler: Handbuch der Hals-Nasen-Ohren Heilkunde. 1926. 2BD. 2) Heymann: Handbuch der Laryngologie. 1900. 3BD. 2 Hefte. 3) L. Kretz und F. Stummeffeld: Handbuch der speziellen Chirurgie des Ohrs und der oberen Luftwege. 1923. 3BD. 4) Zornike: Die Krankheiten der Nase und des Nasenrachen. 1910. 3 Auflage. 5) W. Hajek: Pathologie und Therapie der entzündlichen Erkrankungen der Nebenhöhlen der Nase. 1915. vierte, vermehrte Auflage. 6) Körner: Lehrbuch der Ohren, Nasen, und Kehlkopfkrankheiten. 1902. 7) Avellis: Arch. f. Laryngologie und Rhinologie. 11BD. (Die Entstehung der nicht traumatischen Stirnhöhlenmucocoele.) 8) A. Onodi: Arch. f. Laryngologie und Rhinologie. 17BD. (Die Mucocoele des Siebnelabyrinthes.) 9) Sprenger: Arch. f. Laryngologie und Rhinologie. 19BD. (Ein Fall von Schleimhautcyste der Stirnhöhle.) 10) Eggemann: Zeitschrift f. Hals-Nasen- und Ohrenheilkunde. 58BD. 1923. (Ueber das Vorkommen von Cholesterin-Krystallen bei Kieferhöhlenentzündung.) 11) Katschen: Die Nebenhöhlen der Nase. 1903. 12) Hartmann: Atlas der Anatomie der Stirnhöhle der vorderen Siebbeinzellen u. d. Ductus Nasofrontalis. 1900. 13) 吉井: 大日耳鼻. 第十七卷, 第一號. (前額竇ムコツエーレ) 14) 廣瀨, 義格, 和田: 新撰耳鼻. 15) 吉井, 岩田: 近世耳鼻. 16) 久保: 臨床的耳鼻.

(原稿到着ニ昭和八・九・三〇)

増川論文附圖

巨大ナル前額竇「ムコツェーレ」ノ一例

Fig. 1.

Fig. 2.

Chikanichi Masukawa: Ein Fall von grosser Mucocoele der Stirnhöhle.

増川論文附圖

巨大ナル前額竇「ムコツェーレ」ノ一例

Fig. 3.

Fig. 4.

Fig. 5.

Fig. 6.

Chikamichi Masukawa: Ein Fall von grosser Mucocoele der Stirnhöhle.